平安朝文学における「黄」およびその文字のふるまい

三十七回卒　河端由美

「黄」あるいは「黄色」。無論、英語で言うところのyellowであるが、[注1]この色は、古代日本語には存在しなかった、と言われている。より厳密な言い方をすれば、ここで言う古代とは『万葉集』の時代以前のことを指しており、「黄」については、「キ」という訓を指す。確かに『古事記』『万葉集』『日本書記』等の文献に黄色を示す「キ」なる訓の[注2]確例は見当たらない。また日本語において最も基本的な色名であるといわれている[注3]「アカ」「アオ（ヲ）」、「シロ」「クロ」が、音韻的に見ても、[注2]語源的に見てもそれぞれ共通要素をもっているのに対し、「キ」にはそういった要素がない。従って先の論には充分な根拠があるのであり、一応それはそれで納得が行く。しかしながら、ひとたび「黄」字ということに視点を当ててみると、また新たな疑問も提示されることになるように思われる。

言うまでもなく、「黄」なる文字は他の漢字がそうであるのと同様に、大陸からの輸入品であり、それ自体日本語ではない。『古事記』にも『万葉集』にも『日本書記』にも、「黄」字は多く用いられているが、それを「キ」と訓じ得ない以上、日本語としての「キ」の問題には踏み込んではいけない。しかし日本語は元来文字言語を持たず、それを表記するのに「漢」字、「漢」文法を用いることから始めたという歴史的な事情を考慮すれば、「漢」語における「黄」字の語彙体系における位置、すなわち「黄」は「赤」「青」「黒」「白」と同様に五行説とも密接に関連した最も基本的な色彩語彙であったということが、後世「キ」のそれに何等かの影響を与えたという可能性があるのではないだろうか。

本論は以上のような観点から、「キ」なる訓みの文献上初めて登場する『和名類聚抄』以後の、平安朝文学における「キ」および「黄」字のふるまいを分析しつつ、その両

者のかかわりを考察していこうとするものである。

Ⅰ　数値的な視点から見た色彩語彙

平安朝文学における色彩語彙の様相を考えるとき、普通注目されるのは『源氏物語』であり、『枕草子』である。実際この二作品は、色彩語彙の種類、用例数のどちらとも豊富である。しかし、もちろん、古典文学はこの二作品ばかりではない。更に言えば、作り物語・歌物語・歴史物語・日記・随筆といった、和文形の作品ばかりでもないのである。例えば、純粋な漢文体の漢詩文、変体漢文と呼ばれる説話文学、あるいは変体漢文の流れを汲む漢字かな（カナ）まじり文の説話文学。あるいは和歌文学。文体、ジャンルを異にする多くの作品か存在するのであるから、これらの作品群をも視野に入れた色彩語彙の構造を考えてみる必要もあるのではないか。なぜならば日本古典文学において『源氏物語』・『枕草子』の占める位置はたしかに大きいが、中古、中世、あるいは近世、近代に至るまで広く巷間に流布したのはむしろ、仏教説話、軍記物語などを元とした、語り物の文学であったはずだからである。

もちろん、一口に「色彩語彙」といいはするものの、その「色彩語彙」なるものの示す概念は実に様々であって、また非常にあいまいでもある。色を示し得る全ての語、染めの色、花の色、こういった多くの細やかな分類による色彩を表わす語を「色彩語彙」と呼んでなんら問題はないであろうし、[注4]バーリン、ケイのいう「基本色名」のみを主に「色彩語彙」と呼んでもさしつかえないだろう。しかし、今回の分析及び考察にあたって、前者を一度に考えに入れることは不可能であり、また、必ずしも有効な分析・考察をすることはできないように思われる。従って本論においては赤、青、黒、白と、現在では基本色の中に含まれるといわれる黄、緑、紫とを含めて、用例数をあげた。なぜかと言えば、まず、虹をその色相に注目して分割する場合、日本人は一般的に「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」の七色をあげると言われていることに注目しつつも、「橙」については古典文学においてほとんどその用例がないことと、「藍」については用例数は少なくないものの「藍染め」「藍摺」といった染色・染料に関する用例ばかりであって、色名と、物質名との判別が難しく今日「アイイロ」を一般的には使用しないということを含め、今回の考察からは除外することとしたためである。

表1

文学作品名	赤	青	黒	白	黄	紫	緑
竹鳥物語	0	1	1	4	0	0	0
伊勢物語	1	1	0	12	0	2	0
大和物語	0	2	1	23	0	0	2
篁物語	0	0	0	0	0	0	2
平中物語	0	0	0	0	0	0	1
多武峯少将物語	0	1	0	1	0	0	0
落窪物語	8	6	4	4.3	0	0	0
宇津保物語	58	51	45	43	19	42	26
源氏物語	57	47	35	94	9	39	14
浜松中納言物語	4	2	3	14	2	8	4
狭衣物語	13	7	7	22	0	4	8
夜の寝覚	8	5	1	18	0	0	0
堤中納言物語	1	4	3	7	0	2	0
土佐日記	0	4	5	9	0	0	0
かげろふ日記	2	6	4	20	2	1	2
和泉式部物語	0	1	0	6	0	0	0
紫式部物語	0	11	2	23	2	1	1
更級日記	8	3	4	10	0	3	1
讃岐典侍日記	5	0	6	7	1	0	0
成尋阿闍梨母集	1	2	0	1	0	4	2
建礼門院右京太夫集	1	3	1	11	0	4	2
枕草子	37	43	34	88	5	23	9
日本霊異記	7	6	10	25	8	1	10
三宝絵詞	7	6	7	19	4	6	0
往生要集	10	16	24	66	13	1	2
宝物集	18	8	15	50	2	12	4
打聞集	7	1	3	3	0	0	0
地蔵菩薩霊験記	0	4	2	10	1	1	1
江談抄	7	18	5	13	8	7	1
古本説話集	2	2	5	13	8	7	1
大日本法華経験記	6	6	10	36	3	10	0
今昔物語	74	76	88	207	26	49	4
今鏡	3	9	2	37	5	12	4
大鏡	10	6	8	23	2	13	3
栄花物語	54	53	18	112	13	38	30

表一[注5]にまとめたものは主に散文作品であり、詩歌は物語中に登場するものは引用もあわせて数値の中に含めている。

ただ、ここで注意しなければならないのは、それが色彩語彙に限らず、一つ一つの語の用例数は、その作品の総語数、異なり語数によって大きく左右されるということである。同時に色彩語彙（色彩を表現し得る全ての語の一つ一つを含めた意味で）の総語数・異なり語数によっても左右されるだろう。色彩語彙の使用が、極端に少ない作品では、そこで行われる話題、事象などによって、たまたま使用された語が、使用頻度の上で、その割合が高くなるということが十分に起こり得るからである。表1において、特に基本四色の使用数に注目した時、表の上部と下部に表われている数値に違いがあることがわかる。表の上部に位置する文学作品は、作り物語、日記、随筆、といったジャンルに属する和文系の作品群である。下部に位置する作品群は、変体漢文、漢字かな（カナ）まじり文系の説話集、和文系の歴史物語となっている。『宇津保物語』『浜松中納言物語』『狭衣物語』『枕草子』といった作品が、上部を占める作品群の中で、色彩語彙の使用の「多い」作品である。下部に位置する作品群の中でも、『打聞集』、『地蔵菩薩霊験記』、『古本説話集』などは「少ない」といえるようである。これらのことを踏まえたうえでの明確な基準を定めなければならない。

そこで、今試みに「基本四色の合計が四〇を超えるもの」という基準を設定してみよう。これは言い換えれば赤、青、黒、白の一つ一つの使用の平均が一〇を超えうるものということである。なお、『三宝絵詞』が三九ということで、僅かに基準値に満たないため、参考値として表すこととする。紫、緑の用例数は、各作品において、基本四色の用例数とほぼ同じようなバラつきを示している。特に基本四色においては、白の使用が最も多く、基本四色の合計の半数ちかくを占めるものが多い。紫についてはどの作品についても少ないながら用例が存在する。緑は二、三の例外はあるもののどの作品においてもかなり少ない。しかしながら、こと黄に関しては、必ずしもただ単に少ないとはいえない。むしろ、上部作品群と下部作品群とではかなりちがった様相を呈していると言うべきであろうと思われるのである。そこで、表1の中から色彩語彙の使用の多い主だった作品の、基本四色の用例数を分母とし、黄の用例数を分子とした値を、百分率風に表わしてみる。そしてそれをほぼ時代順に並べかえてみると、表2のようになる。

表2

文学作品名	黄／四色
日本霊異記	16.3
（三宝絵詞）	10.3
往生要集	11.2
落窪物語	0.0
宇津保物語	9.6
枕草子	2.5
源氏物語	3.9
大日本法華経験記	5.2
狭衣物語	0.0
栄花物語	5.5
江談抄	18.6
今昔物語	5.8
大鏡	4.3
宝物集	2.2
今鏡	9.8

表1の上部に位置した作品には基準値四十をこえるものが少ないため表2においては除かれているが、これらの作品には元々黄の用例を持つものがほとんどないのであるから、その点から判断してもさしつかえないであろうと思う。表2の結果を見ると、説話集、歴史物語において、黄の使用は他のジャンルの作品よりもいくぶん高い傾向にあり、しかも年代を遡るに従ってその使用頻度が高いと言えよう。また、作り物語のうち『宇津保物語』の数値が高いこと、それを除けばこちらは逆に年代を下るに従って使用頻度が高くなる傾向にあるようだ。

表1、2を見ると、平安和文における色彩語彙の様相は、まず基本四色において白の優勢が知れるけれども、それ以外は特に傾向性は見られないようであるということ。緑については、一部の作品を除き、一概に言って少ない。これは[注7]伊原昭氏の言われた中古以降の和歌文学において「みどり」が「あを」凌駕するまでに勢力を延ばしているのとは対照的であり、散文作品においては依然として青の勢力が強く、緑はまだまだそれに及んではいないと言うことがいえるようである。また、紫はこれも一部の例外を除き緑、黄に対し、一概に安定して高い数値を示す。そして黄は、『宇津保物語』を除き、前期の和文系の文学作品においては（ほとんどないといってもいいほど）使用頻度が低く、後期になると歴史物語という新たな文学ジャンルの登場の影響もあってか、高くなる傾向にあり、一方、漢文体、漢文訓読体、片仮名文の系統では前期の作品は高く、後期の作品は『江談抄』を除き低くなる傾向にある。と言うようなことが考えられる。

Ⅱ　用例に見る黄およびその文字のふるまい方

それでは黄の使用頻度が、その作品の文学ジャンルや年代によっていくらかの影響を受けているとすれば、その原因にはどのようなことが考えられるのであろうか。その原因を探るためにも、平安朝文学における黄使用の実態、すなわち文脈中での黄のふるまい方について考えたいと思う。

文学ジャンルということで考えるならば、おおまかに

「和文」とよばれる系統の作品群と、漢文体、漢文訓読体によって書かれた作品群とに分けられるであろう。前者は作り物語・歌物語・女流日記・随筆・歴史物語を含むものであり、後者はおもに仏教説話集を指すものである。

『古事記』『万葉集』『日本書記』等の上代文学においては、漢文になる文脈にしか用いられなかった黄も、平安朝に入って和文系の文学作品が登場してくると、その用例は細々ながら姿を現すことになる。もっとも、黄を「キ」とよむ確例が出てくるのは、『和名抄』である。『和名抄』の記述を次にあげてみよう。

○黄木「和名岐波太」（「」内ニ行書き）（巻十四）

○黄瓢「和名木宇利」（巻十七）

確かに「キ」という語が出ている。しかも「キ」は黄にあたるということは疑いないことである。しかし、そうはいっても、「物語のおや」といわれる『竹取物語』や、『伊勢物語』、『大和物語』などの初期に黄の用例が存在せず、作り物語、歌物語、日記、随筆といった平安朝和文の主流をなす文学作品に黄の用例が乏しいことは表1の通りである。また、和歌文学になるとこれ以上に黄の用例は乏しく、少なくとも勅撰集には見出せない。

和文系作品において黄が修飾する語、または黄が示す物体などを見てみると、次のようになる。

［語形別の用例数］

表3は、平安朝文学において使用された黄が、どのような語形で使用されているかを示したものである。なおこの表において漢文体表記の作品を除いたのは、語形を探るということについて　は不適当と考えたためであって、他に

表3

文学作品名	きなる	きばむ	きがちなる	きいろ	き	熟語
宇津保物語	5	10	2	2		
源氏物語	4	4				
かげろふ日記	1				1	
紫式部物語	2					
更級日記	3					
讃岐典侍日記	1					
枕草子	2	2			1	
今鏡	5				2	
大鏡	2					
栄花物語	9	1			1	2
三宝江詞	1					3
往生要集	4				2	5
宝物集	1					1
大日本法華経験記		1			1	2
地蔵菩薩霊験記						1
今昔物語	15	3			4	3

意味はない。

表3をみると表2において黄の使用頻度の高かった仏教説話集に属する作品群において、黄は漢語の熟語として使用されていることの多いのがわかる。また全体的に「きなる」と言う語形が断然多く使用されている。また、和文系の文学作品文のなかで突出して黄の使用頻度の高かった『宇津保物語』では「きばむ」の使用が多く、仏教説話集の中でも時代の下る『今昔物語集』は熟語の使用よりも「きなる」の使用が高く、むしろ和文系の作品と同じ傾向を示している。

［黄の修飾する語・物体など］

では次にこれらの語が修飾している語、あるいは示している物体等について用例をあげつつ見ていきたい。

(1) 日記・作り物語・随筆・歌物語

まず見ていきたいのは『宇津保物語』を除いて黄の使用の極端に少ない作品群である。

○（キナル）泉（五例）―黄泉の直訳か

＊こけおふるいは千代ふるいのちをばきなるいづみの水ぞしるらん（宇津保物語・藤原の君）

＊現人になりて、末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、おのづから、語らひ寄る風の紛れも、ありなん。（源氏物語・手習）

○（キバミタル）紙（十二例）―黄紙などの直訳か

＊陸奥紙にて、年経にければ黄ばみ、厚越えたる五六枚、さすがに、香にいと深くしみたるに、書き給へり。（源氏物語・若菜上）

○（キガチナル）～色［衣装］（二例）

＊鈍いろどもの、黄がちなる今様色など着給ひて、（源氏物語・柏木）

○（キナル・キバミタル・キ）布・衣装（十二例）

＊香染に鈍色の一重、紅の袴の、少し黄ばみたるなど着て、寝給ひたりけるが、（狭衣物語）

＊夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、（更級日記）

○（キナル）玉（一例）―黄玉の直訳か

＊白き色紙、青はき表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、（源氏物語・絵合）

○（キナル）銭（一例）

＊かくて、きばみたるひちかさねに、こがねのぜに一つゝとつゝみ、（中略）きばみたるをば、（宇津保物語・蔵開上）

○（キナル）木（一例）

＊れんじすべきところには、しろくあをくきなる木のぢんをもちて、色いろにつくらせ給せ、（宇津保物語・桜の

うへ上）

○（キバミタル）絵（一例）

＊白木おりびつに、きばみたるゑかきて、しろきばみたるぜにつくれり。（宇津保物語・国譲中）

『宇津保物語』は現在のところ作者未詳ではあるが、「黄の使用」という点から考えてみても漢詩文に造詣の深い男性の手になる作品であろうことが推定される。黄という色彩語彙一つをとっても『宇津保物語』は、和歌の系統を引く歌物語・女流の手になる作り物語・日記・随筆と比べ使用度数的にも大きく隔たっているばかりでなく、使用された黄のふるまい方にもいくらかの隔たりが見られるからである。[注6]他の作品が黄を使用する場合に最も多いのが唐紙、紅花染の褪色、生絹（キナルのキは生を当てるべきという説もある）であって、それ以外の漢語直訳の語（直訳語彙）の使用はほとんど見られない。それに対して、『宇津保物語』では漢語直訳の語（キナルイヅミ、キナルニシキ、キナルキ）の使用もあり、また黄の示す物体も樹木、衣類（袴、小袿・褪色との関わりは特には考えられないが詳しくは不明）、銭、紙（色紙、薄様）、泉、錦、絵となっていて必ずしも多彩ではないが他作品ほど限定されているわけでもない。『宇津保物語』が仮名文学としては、その文学ジャンル及び文体の成立途中にあった、ごく初期に書かれたものであるという、やや特殊な立場が、こういった黄の使用にも反映しているものとは考えられないだろうか。

(2) 仏教説話集に使用される黄の例

では次に先の(1)の作品群に反し、一概に黄使用の多いといえた仏教説話集を始めとする説話文学について見ていきたい。なお歴史物語については後述する。

○（キナル）～

＊閻王ノ宮コニメサル（中略）黄ナルスナコヲフミスク七重アル鉄ノカキアリワタノコトクニシテメクリメクレリ（『三宝絵詞』）

○～は（キナリ）

＊胃をごごく五穀の府と為す、（中略）其の色黄なり。（『往生要集』）

○（キ）

＊胎を出ずるの時、忽ちに赤黄の色ありて、西方より至りて殿の内を照曜せり。（『大日本法華経験記』）

○（キ）に～する

＊女ノ鏡ヲ売リニ定基朝臣ガ、家ニ来タリケレバ、取入レテ見ルニ、五寸許ナル押覆セナル張笥ノ、沃懸地ニ黄ニ蒔ルヲ、睦奥紙ノ馥キニ裏テ有リ。（『今昔物語集』）

○～は（キバミタル）

＊其ノ泉ノ色頗黄バミタル。「何ナレバ此ノ泉ノ黄バミタルニカ有ラム」ト思

テ、（中略）水ニハ非ズシテ酒ノ湧出ル也ケリ。（『今昔物語集』）

これらの用例から知れることは、特に使用の多い「キナル」については、その語形もさることながら漢語の熟語を直訳した形のいわゆる「直訳語彙」が目立って使用されていることである。無論説話文学は始め漢文体によって著され、またその素材も漢籍・仏典から多く採られているのであるから、直訳語彙よりむしろ漢語そのままのほうが多いというのは当然のことであると言えるだろう。しかも、漢語において最も基本的な色彩語彙であるという「黄」の位置付けが、そのまま反映しやすかったと考えられ、説話文学に「黄」の使用が多いのにもうなずける。

ただ、表3によっても明らかなように、『今昔物語集』については他の説話集とは異なった傾向が見える。しかも『今昔物語集』を全体的に、一様に眺めるのでなく、特に本朝世俗部（巻二十二～）とそれ以前とに分けて分析してみると

［巻一～二十一］

○所従ノ眷属ハ衣装ヲ染ノ張リ、青・黄・赤・白ノ色ヲ尽シテ、薄ク濃ク調フ。

（他に「青・黄・赤・白・紅・紫ノ光ヲ」一例、）

○此ノ菓樹ヲ見ルニ、赤ク黄ニシテ金ノ如シ

（他に「赤黄ナル光」「其ノ色黄白也」一例ずつ）

○経巻ヲ開テ見奉ルニ、只黄ナル紙許有テ文字一モ不在。

（他に「黄ナル衣」「黄ナル色」「黄ナル犢」「黄ノ粟」「黄ナル砂」「黄ナル金」「黄ナル紙」一例ずつ「黄ナル光」二例）

○毎月ノ十五日ノ黄眠ノ時ニ至テハ、必ズ、五躰ヲ地ニ投テ、西ニ向テ礼拝シテ、

（他に「黄紙」一例）

○火ヲ燃シテ、小石ヲ以テ扣ケバ、中ハ黄也。吉ク見レバ金ニハ有リ。

○身ノ色ノ黄黒ニ変ジテ恐シ気ナリ、

［巻二十二～］

□黄ニ蒔ルヲ（前出の一例）

□水ノ底ノ砂ヲ、此彼掻立リケレバ、鞭ノ崎ニ黄ナル物ケルヲ、

□　亦大指ノ大サ許ナル物ノ黒黄ミタルガ、長二三寸許ニテ三切許打丸カレテ入タリ。

（他に「泉ノ色頗ル黄ミタルニカ」それぞれ前出の一例ずつ）

というように、巻一～二十一では漢語の熟語を「キナル～」と訓じた例が存するのに対して、巻二十二以降の本朝世俗部にあっては、説話文学では他には例のほとんどない「キバム」を始め、「キニマク」などかなり日本語の語感に近づけようとした跡がうかがえる。

こういった現象は、『今昔物語集』本朝世俗部の持つ他の説話集とは異なった何か固有の特徴に関係があるのではないかと考えられる。

(3) 歴史物語において《黄》が修飾する物など

○植物（四例）

＊ 中島の松に懸かれる蔦の色を見れば、紅、蘇芳の濃き薄黄き、青う黄なるなど、（栄花物語・巻七）

○□わき（一例）

＊されどおとゞ「あなもの狂し。ことのほかや。誰かたゞ今さやうに口わき黄ばみたるぬしたち出し入れては見んとする」とて、ゆめに聞しめし入れぬを、（栄花物語・巻三）

○布・衣装（九例）

＊位はまだえさせ給はぬは、黄なる衣にそ実にもおはしますらむと。（今鏡）

○紙（二例）

＊くろがへのほね九あるに黄なるはりたるあふぎをさしかくして、（大鏡・序）

○黄金・光（各一例）

＊曇なき庭に、紅葉、菊の色、黄なる光も赤き光も添ひたらんと見えて、所がら匂を増し、（栄花物語・巻三十八）

○漢語の熟語（二例）

和文系の文学作品のうち特に歴史物語を別に分けて考えるのは、歴史物語における黄の用例が、数値的に見て他の諸作品群と異なる傾向（つまり、幾分使用度数が高い）にあるため、黄が使用される際のふるまい方も他と異なっているのではないかと考えたことによるものである。

こうして用例を見てみるとやはの先の(1)の場合とは異なり、(2)仏教説和集によく見られたような用例が多くなっていることがわかる。歴史物語は黄の使用に関して言うならば(1)と(2)の丁度中間に位置するものと考えられるであろう。

これら(1)(2)(3)を通じて言えることは「黄」という色名は、たとえ「キ」と訓じられる場合であっても、明らかにその使用者（すなわち書き手）の漢文学への親しみとか、語られる文脈とか、話題とかに左右されるものである。少なくとも女流の手になる文学作品には全く使用されない場合も多い。あるいは使用されることがあっても、漢詩文からの引用、僧侶の衣服、唐紙、紅染の褐色、生絹等にしか使用しない。それでも『源氏物語』や『枕草子』には、

○白き色紙、青き色紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、（『源氏物語』絵合）

○空うち曇りて風のいとさわがしく吹きて黄なる葉どものほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。（『枕草子』一九九段）

など、漢詩文からの引用そのままでない形（とはいっても依然漢語の直訳語彙であることにかわりはないが）が見える。

つまりこれらのことを総合して考えると、

①平安朝文学の「黄」および黄字の使用は漢語を直訳した形のものがほとんどであったこと。

②日記・作り物語・随筆や歌物語では黄で表される語あるいは物体に制限があり、それらは主に唐紙、紅花染の褪色、（生絹）などであったこと。

③平安朝の仏教説話あるいは説話文学の場合は漢語としての使用がおおいが、直訳語彙となる場合にはその対象となる語や物体を特には選ばないこと。

④女流の手になる文学作品であっても、作者が漢詩文に造詣の深いものであれば漢語の使用や、紙、褪色などに限らない直訳語彙の見えること。

⑤説話文学にあっても『今昔物語集』ではむしろ漢語としての使用より直訳語彙の使用が多くなっており、巻二十二以降の本朝世俗部ではそれ以上に他の説話文学とは違った傾向の見られること。

⑥歴史物語においては他の和文系の作品群と、仏教説話集との中間に位置するような状況であること。

等があげられると思われる。

Ⅲ　作品の文章的な特徴と黄のふるまい

物語文学における『宇津保物語』や歴史物語、説話文学における『今昔物語集』本朝世俗部といった、先に他の作品群と異なった傾向を示したこれらの文学作品は、他の同ジャンルの諸作品に比して文章的に異なった特徴があることが知られている。最も初期の物語作品の一つに位置する『宇津保物語』の文章に、漢語や漢文訓読語の多く存することはすでに多くの場で語られていることである。また歴史物語、『今昔物語集』について春日政治氏は「草仮名文の漢文訓読の影響を受けたものでは歴史物語を見なくてはならない。先づ栄華物語であるが、この物語は女流の宮廷日記を原拠として作ったとも言われるほど、草仮名文本領で書かれてゐるものである。」「今昔物語集は、編者が平易通俗に書かうとした後は十分見られるのであって、殊に本朝の如きは、草仮名文に近いもの、時代語に近い平易なもの、更に原拠が漢文でも亦極めて砕けたものもあるが、亦天竺・震旦の部は勿論、乃至本朝のものでも、原拠の漢文であるものは、とかくそれに即き易く、字音語彙の多いことは勿論、文脈から見て和漢混淆体に入るべきものが相当存して、明らかに草仮名文の系統と離れて来てゐると言わなくてはならない。」[注8]（「和漢の混淆」）と述べられている。

これらのことを考え合わせると、ある文学作品に黄なる語がどの程度使用され、またそのなかで黄およびその文字のふるまいがどのようなものであるかを考えるとき、その

作品のジャンルばかりでなく、その文章的な特徴（文体、語彙を含めて）が大きく関係しているといえる。黄は漢文訓読を基とする仏教説話集や、漢文訓読語の多く混入した『宇津保物語』・歴史物語などでは比較的多く使用されたが、古代日本語（やまとことば）を基とした草仮名文・和文にはほとんどといっていいほど使用されず、しかもその使用に際しては文脈や対象とする語が限られていたのである。

そしてこの事実は逆に、平安期においての「黄（キ）」なる語の色彩語彙における位置付けをよくあらわしているものであろうかと考えられる。つまり、古代日本語において元来存在しなかったはずの「黄（キ）」は、平安期に入って漢文体表記以外の文献にもその姿を現すけれども、「アカ」「アヲ」「クロ」「シロ」のように自由に用いられることはなかった。その使用にはその文章的特徴として「漢文的」であるべき制約があったのである。しかしながら漢文的な文章と和文的な文章の入り交じってゆく過程に、「黄（キ）」を使用する場面を拡大しようとする動きや、語形を始めとしてより日本語として「こなれた」ものにしようとする動きが見える。

平安期における「黄（キ）」の使用、およびその文脈中でのふるまい方は中世以降現代に至るまでの、「黄（キ）」あるいは色彩語彙全体の変遷の過程を見る上で示唆的であり、その流れの方向を決定づけるものとして重要であると言いうるのではないだろうか。

［注解］

注1　佐竹昭広氏「古代の言語における内部言語型式の問題」（『万葉集抜書』岩波書店）等の論による。

注2　佐竹昭広氏「古代日本語に於ける色名の正格」（同右）の論にもふれられている。

注3　柴田武氏「言語における意味の体系と構造」（『日本の言語学』五・大修館書店）でふれられている。

注4　「Basic Color Terms：Thier Universality and Evolution（基本色彩語－その普遍性と進化）」であげられた「基本的色彩範疇」の十一語。「白・黒・赤・緑・黄・青・茶・紫・ピンク・橙・灰」を指す。

注5　伊原昭氏編『日本文学色彩用語集成』中古編（笠間書院）を参考に、原典にあたった。

注6　『かげろふ日記』に

＊橘の実などあるに、葵をかけて、あふひと書きけどんよそにたちばなの　といひやる。やゝ（さしうありて、きみがつらさをけふこそはみれ　とぞある。

というように「君」と「黄実」を掛けた表現が見えるが、掛詞と

いうレトリックの関わる問題なので、ここでは用例を紹介するにとどめたい。

注7　伊原昭氏「『みどり』へ」（『文学語学』11号昭和34・3）

注8　『古訓点の研究』（風間書房）